ＪＫ(×2)が異世界へ行きました。

Ｈ∧Ｌ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＪＫ（×２）が異世界へ行きました。

【Ｎコード】
Ｎ８４３９Ｙ

【作者名】
Ｈ＜Ｌ

【あらすじ】
女子高生が突然の異世界トリップ。
普通なら取り乱して泣くところ　…ですが、それが二人なら？
仲仔なＪＫは二人揃えば無敵です！

「異世界？余裕～（笑）」

あげぽよ×クールな今時Ｊｋ達が好き勝手して、それに振り回される王子様やら宰相様やらのお話し。

重要なのはつけまとかクレンジングとか日焼け止めとかがアルかナイか。

（＜ω＜）プロフ

【しゅりたす】

◆岬　朱里　（みさき　しゅり）
◆ＪＫ？

＊＊＊好き＊＊＊

◆買い物
◆マンガ
◆携帯ラブ！
◆ダリン（〃ω〃）照り／／／
◆リッたん

＊＊＊特技＊＊＊

◆メール早打ち
◆妄想
◆寝ること

【りっちゃむ】

◇赤坂　理津　（あかさか　りつ）
◇ＪＫ？

＊＊＊好き＊＊＊

◇メイク
◇猫
◇黒
◇乙ゲー
◇美白

＊＊＊特技＊＊＊

◇歌
◇料理
◇１８禁（／ω＼）照り／／／

＼しゅりたす×りっちゃむ／
最強仲仔　よろぴく（＾ω＾）／

※編集／しゅりたすｗｗｗ

※＼しゅりたす×りっちゃむ／ｂｌｏｇより抜粋。

（＜ω＜）プロフ（後書き）

初投稿です。よろしくお願いします。

始まり？（プロローグ的な？）

目開けたら、周りには怪しげなオッサンたち。　みんな杖持ってて変な格好。

と、イケメンな男が１人。

イケメンなのに変な格好。

軍服？軍服コス！？なんか黒くて悪役っぽい！

見回すと、外国の神殿みたいな建物だった。

えー？

オッサンたちが何かざわざわしてる。どうしたどうした？

「お前たちは一体…」

お前こそ一体…とか言ったら怒られそうなので、黙っ　て見つめるにとどめた。

先程のイケメンのセリフを反芻する。

”お前たちは一体…“

”お前たちは一体…“

”お前たちは一体…“

「やばー…超いい声」

「は？」

「や、なんでも」

黒髪なびかせて、この男色気パねぇ…。

うぅ…！

「いやーんリッたん！ヤバいんだけど！キタコレ！」

右隣のリッたんの腕をバシバシ叩いたら、超冷たい目で見られた！

「キタコレ言うな。キモい」

「ひどっ。せっかくの胸きゅんを！」

私が1人きゅんきゅんしてる間、隣のリッたんことリ　ツさんは涼しい顔で周りを観察していた。

「何ここ」

リッたんの問いかけにイケメンは無表情に答えた。

「ヴェール国の王宮内にある神殿だ」

始まり？（来ちゃった。）

「ヴェール国だってよ、リッたん」

首を傾げるリッたん。

「ヨーロッパ的な？」

「さぁ…アラビアン的だったらどうしよ？あそこらへん意味わかんないんだけど」

「え、あたしヨーロッパらへんもよくわからんけど」

ダメダメな二人が揃っても何もわかんない、と。

「朱里ググれ」

「おけー」

カチカチカチカチカチカチカチ…

あはん。　圏・外☆

「リツさん無理ッしたぁー」

「ちッ使えねぇ」

「携帯が、だよねもちろん」

リッたんは時たまドS…

てかiモード繋がらん！やっぱ外国か！！電波悪いだけー　！？

リッたんが怖いからイケメンに話し掛けてみた。

「ねぇねぇ」

「なんだ」

またまたざわつくオッサンども。

始まり？（来ちゃった？）

「日本て知ってる？」

「にほん？」

「アメリカってわかる？」

「あめりか？」

はい、発音が大変可愛らしいです。

「リッたん……思いたくないけどコレってさぁ」

頭の中で１つの単語が弾き出されました。

「言ってみ」

「えっとぉ～最初に”い”がついて～、最後に”ぷ”がつ　くのな

ーんだ？」

「さぁ？」

リッたん即答。

「一瞬でいいから考えようよ」

「めんど…」

リッたんクール。

「正解は異世界トリップ！！」

「ないわー…」

「私もそう思う」

でもさぁ

チラリとイケメンと神殿を見て、もう一度リッたんを　見た。

「ぽくね？」

「ぽい」

だよね。

リッたんも色々諦めて認めたみたい。

というわけで、うちら異世界に来ちゃったみたいです。

始まり？（とりあえず。）

――――その後。

「てかマジで？リアルに異世界？なんか信じられない　んですけど」

夢オチじゃね？

だって異世界とかトリップとか王国とか、小説の中の　話やーん。

「けど二人揃って学校帰りに海外とかないじゃん。な　んか日本語通じてるし」

冷静なリッたんさすが！でもそれなら…

「マジ～？あーあーどうせなら旅行バッグで来たかった　しぃ。こんなん（学校鞄）とかマジ萎えー」

メイク落としは？ワックスは？アイロンは？充電した　いんだけど！コンセントなんてもちろんないよね…

「お、ラッキー。あたしセブンで買ったナプキン入れ　っぱ。終わったけど。朱里、カラコンある？」

「無いっすー。メイクポーチとリップ入れてただけで　も褒めて～」

「おい」

学校鞄を各々漁る私たちにちょっとイラついた声をか　けてきたのはさっきのイケメン。

始まり？（とりあえず。？）

「はい？」

「お前たち、さっきから何を二人だけで騒いでいる？　……おい術者共！」

イケメンは私たちに尋ねたかと思ったら、後ろを振り　返ってローブ被った怪しげなオッサンたちに厳しい声をか　けた。

「お前らの仕業か？どこから喚(よ)んだ？」

オッサンたちは「ひっ…！！」とか言ってビクついて青ざめて　いる。

「こいつら二人とも、明らかに我が大陸の者ではない　だろう。しかも突然現れたのを俺もしっかり見ていた　が？」

後ろ姿で見えないけど、言葉１つ１つが刺々しい。イ　ケメンがお怒りだ。

しかしまぁ低い美声がまたいい感じに耳にクる。

オッサンたちの中でも一番年とってそうな、長い白いヒゲ　のオッサンがプルプルしながら一歩前に進み出た。

名前わかんないから命名「勇気あるオッサン」。

「お、恐れながら…」

「何の儀式をしていた？」

怒りを含んだイケメンの声に、勇気あるオッサンはこっち　をチラリと見て、「お耳を…」と、イケメンに何やらゴ　ニョゴニョ内緒話をした。

するとイケメンはピクリと反応し、真面目な顔して勇　気あるオッサンと共にこっちを見てきた。

「余計なことを…」

「申し訳ありませぬ。しかし私共もまさかこのような　…」

「ではこの二人が？」

「いえ、どちらかかと」

意味深な会話が始まった。

「イケメンが見つめてくるよリッたん。何コレ脈あり　？」

「見つめてねぇし。明らかにじろじろ観察されてんだ　ろ」

「でも心がときめく…」

「…ばか？」

リッたん冷た―い…！！！

始まり？（とりあえず。？）

まぁぶっちゃけて言えば。

うちら二人は花嫁候補として喚(よ)ばれたらしい。

うんありがちありがち。

誰のって、もちろんあのイケメンの。

そしてイケメンは王子様だった。

うんうん、王道王道。

けどさっきの姿からするとどっちかって言うと魔王だ。

魔お…じゃないイケメン王子様の名前は……――

「俺はリディアス・レイ＝ヴェール」

「んん？り、りで…」

「リディアスね」

ちょ、リッたん何で言えるの！

「…りであす」

「リディアス、だ」

イケメ…じゃなくてリディアスが訂正を入れてくる。　発音するとムズいんだよ！

「りでぃあす」

「惜しい」

とリッたん。

「何か違う」

とリディアス。

「りでぃあす？」

言えた？

首を傾げたら目の前にいたリディアスはニヤリと笑って、

ニヤリと笑って……――――

ちゅ。

ペロッ。

「――――仕方ないな、”リド”でいい、……シュリ？」

耳にキスして

あげく舐めて

囁きやがった。

は？私？

ええ、もちろん惚れましたけど。

だって胸がきゅんきゅんしたあぁー！！！！

なにこのチャラ男…！！！！

閑話

変な女…たちが現れた。

＊

ヴェール王国は大陸の中でも1・2を争う大国。この数百年安定した繁栄を誇り、城下の都も活気に満ちている。

そんなヴェール王国には現国王の元に2人の王子たちがいる。

第1王子　サイル。
御年28歳。

第2王子　リディアス。
御年26歳。

最近のヴェール王国家臣達の関心は、2年前隣国の王女と結婚したサイル王子から、未だにのらりくらりと婚約者どころか恋人も決めない第2王子リディアスにシフトチェンジしている。

そんな今日この頃。

＊

変な女たちが現れた。

何をとち狂ったか、家臣達は国家が誇る最高位魔術師たちを総動員

して異世界から女を召喚したらしい。

しかも何故か2人。

――――…嫁候補？

…正直まだ遊んでいたいんだが。

＊

リディアスは異世界から来た2人を観察した。

向かって右の女はフワフワした髪を腰まで伸ばし、茶色とも栗色と

も言えない不思議な色をしている。

「ねぇねぇ」などと軽々しく声を掛けられた時は驚いた。

隣の女はリディアスと同じ黒髪を…なんと肩より上で切り揃えていた。

普通女性は髪を胸元辺りまでは伸ばす。

2人は知り合いらしく、親しい口調で会話している。

似たような服装をしており、下着ではないのかというようなスカート……

（これはスカートと言えるのか？）

……もどきからは、白い足が惜しげもなく晒されている。

そして、2人とも目がでかい。睫毛に至っては恐ろしく長い。人形のようだ。

唇は見たことも無いほど光っており、ぷるぷるしている。

会話を聞く限り、なんだか頭の足りなさそうなフワフワ髪と、無表情で冷たそうな黒髪。

――この2人のどちらかと結婚…。

無理だな。

そう思った。

名前を教えたらフワフワ髪が困った顔をして言った。

「りでぃあす？」

ずっきゅん。

――――前言撤回。

フワフワ髪にしよう。

閑話（後書き）

第1王子サイル「リドは昔猫飼ってたよね」

家臣「ええ、可愛がっておられました」

第1王子サイル「確か茶色の…」

家臣「いえ栗色では」

第1王子サイル「そうだったかな？ちょっとお馬鹿な子猫だったよね（笑）」

それから？（むしろここから？）

あの後、チャラ男…もといリディアスはフェロモンを大量放出させて口説いてきた。

もうすでにフォーリンラブな私はバッチコーイ＼（＾ｏ＾）／で口説かれました！

リッたんの超冷たい視線はとりま無視！

さっきまでは魔王だったけど、今は夜の帝王なリディアス。

リディアスの後ろにいるオッサンたちからは彼の長いマントで隠れてて見えないけど

抱き締めながらさり気に太ももさわさわしてますこの人！

これでブッサイクなオヤジだったら痴漢だけど…

「やん！えっちぃー」

「ああ、すまない。柔らかくてつい手が」

「え～リドなら許しちゃうーみたいなー」

美形なら許せる。
だって私乙女！たぶんしょく〇んまんに遭遇したドキ〇ちゃん並みに目がハートと思う！

「どこまで許してもらえるのか確かめようかな？」

「きゃッ☆」

――――――ドグシッ！！！

「……痛いですリツさん」

「目ェ覚めた？」

「バッチリ。」

ＤＳの角でぶん殴られました。
怒ったリッたんマジ怖い。

「こんなトコでイチャつくなバカップル」

「えー」

「うざいキモい。うざキモい。」
「二重苦！ごめんなさい～！！」

リッたんにキモがられるなんて嫌！

ため息をついたリッたんは、チラッとリディアスを見て言った。

「超遊んでそうじゃん、こいつ」

「だよねー思った～」

ウンウンと頷いたら、気のせいかリディアスのエロスマイル（命名）がビキッとひくついた。

オッサンたちも何やらハラハラしてるみたい。

「なんかホストっぽいし。百戦錬磨ってゆーかさぁ」

リッたんはリディアスを上から下まで観察してる。

見つめられてるからってリッたんに惚れんなよ！リッたんクールビューティーでマジ美人だけど！

てかホストって。

「わかるー！Ｎｏ．１とか飛び越して、殿堂入りしてそう！んでガンガン客に貢がせてそう～」

「あーそんな感じそんな感じ」

それから？（むしろここから？？）

「……よく分からん言葉が多いが、なんとなくお前たちの俺に対する印象は分かった…」

美形のため息！なんかアンニュイで萌える！

「うちらのどっちかを花嫁にするんだっけ？そのために喚んだんだよね」

リッたんが私の腕をグイッと引っ張って、後ろから抱きしめてきた。

いやんシュリどっきどきー！

なーんて考えてる内にもリッたんとリディアスの会話は進んでいく。

「シュリでいいのね？」

「シュリ”が”いい」

「花嫁とか言ってるけど、愛人とか…”側室”だっけ？そーゆーや

つならボコッて潰すよ」

りりりリッたん！潰すって……ガクブル。

「本当にお前は恐ろしいな。愛人や側室じゃない。正式な妻として迎える。シュリ1人だ」

公開プロポーズキター（・∀・）！！！

ただし何故かリッたんの腕の中だけど！

リッたん刑事の取り調べは終わらない。

「過去の女関係は？」

「……後腐れのない別れをしているから問題はない。ちょうど身辺整理が終わった所だ」

「ついでに聞くけど、シュリがあんたの嫁になったとして、うちらの扱いはどうなんの？」

「シュリは妻として、もちろん私と共に城に住んでもらう。お前……リツと言ったか？……は、妻の友人であり貴賓として、同じく城に部屋を用意するつもりだ。もとよりこちら都合で無理に異世界から来てもらった身、望むなら郊外に屋敷や領地を与えよう」

「ふーん……ならまぁヨシ」

何がヨシ？とか尋ねる間もなく、私はリッたんにドーンと押されて、前にいたリディアスの胸に文字通り飛び込んだ。

「んぶッ！！！」

「シュリ、私が許す。そいつの嫁になって幸せになれ」

「へ？いきなり何？」

今度はリディアスの腕の中で首を傾げると、リッたんはこちらに来て初めての笑顔でキュピーンとサムズアップして言った。

「シュリ、あんたがそいつの嫁になれば万事解決。衣食住に困んな

いしシュリは念願のダーリンｇｅｔ。私は結婚なんてまだ無理だからヨカッタワー」

「えっと、リッたん？」

五分前まで「信用ならねぇ」て顔でリディアス見てたよね？

「シュリ、お幸せに」

――――私、リッたんに売られた系？

包み込む暖かい腕に力が入った。

「幸せにする、シュリ」

「…よろしくお願いシマス！」

うん。ときめいた！

ディスティニー！！！！！！！

それから？（王子はこんな人）

婚約しました。

わーい、（´ー｀）ノ

てことで、ダリン（て言ったらリッたんにど突かれた。キモいんだって！）について紹介しちゃいましょ！

「ケータイ使えたらプロフ作るのにー」

ブーたれた私の隣で、紅茶飲んでるリッたんがチラッとこっち見てきた。

「プロフって…あの自己満ブログの？」

「自己満言うなー！私とリッたんの友情の結晶だろッ」

「うん。シュリの一方的なね」

ひどッ！

「アレ作ったのシュリ1人じゃん。私知らんし」

「リッたんがちっとも更新しないから私が全面的に編集したのー！」

「へぇ」

わぉ☆そっけな！

今、うちらはリドに貰った（？）私専用の部屋にいる。

どんな部屋かってーと～

「ベルサイユ宮殿の一室はきっとこんな感じじゃね？風」

とりま広いしゴージャス☆

たぶん南向きの部屋は日中超明るいし暖かいし、お嬢な白いテラスもある。

お庭も芝生とかお花がワッシャー咲いててい感じ。

「ちょー好物件だよね！」

「あのチャラ男も少しは役に立つじゃん」

「それー」

キャハキャハ2人で仲良く笑ってたら

「おいコラ。そこは否定しろ」

青筋ピクピクさせたチャラ…じゃなくてリディアスが、いつの間にかドアの所に立っていた。

そういや初日にチャラ男なるものについてはリディアスに教えてたな。

「てへぺろ☆（・ω<）」

――…ど突かれました。

もちろんリッたんに！

「それイラッとくる。」

だそうです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8439y/

ＪＫ(×2)が異世界へ行きました。

2011年12月9日02時10分発行